

龍

浩

世

說

乙



誂諧世説卷之二

目録

万子蕉翁の書と乞説

大草蕉翁の墓と侑る説

翁病中看病人の句と乞説

其角嵐雪が柔の句歎息の説

或人其角ふ巻の点と乞説

嵐雪が素猫を愛と乞説

惟然埽布と埽説



誹諧世説卷之二

万子蕉翁の書と乞説

芭蕉翁金城逗留の内連中發白短冊を徳め  
 り〜い〜らん万子翁を事ぬく只南無高木佛  
 の五字をて書て〜い宋窓本号とて〜竹のうら  
 や家ハ翁の友とて〜んと〜されたる家方  
 らどけ一隅をて奉てあるべし〜ん〜

大草蕉翁の墓の信説

大州と芭蕉翁の字ありて其の二衣一鉢の

まうけふ塵の浮世をいつくもりの以流の臣者かろ翁  
の生前も悔いて志厚くもやげくせし人あり故  
ふ翁乃減損へる哉こころ子貞が家とよん庭とらうか  
そ面影をとまていしつ終るこころ有時翁の墓へ行て  
か多翁のや塚らう外子位をうり 大州

かくの歌をくしつ終るこころをたふけほへ菴中に深く  
菴こ居て誦偈の外ら世との交りをもてらておの  
しくりのわりとに其連中れりきりふいうやして能偈  
の席きくはとも又二と子も交りてつうくうら

坊う死抱ごうりとも世終るとりうふ大州書て曰  
そこのあり翁感ほへ世との風流流りといふべし志うか  
二と子ふ交りても無用の事なりされど誦偈ゆへおろく  
世上一交りもれどこのづら流りうおられて老の身へ遠く  
哉そのなりたふ誦偈の時とどのくふ交りりあり其  
外、名を使りして何の用事しとて一生おの交りを絶て  
かりうらもなふ執心のありさてそを家門ふ大州去来道  
翁も頼母し死るふとひ終ひるもかろりのある由ふとて

翁病中看病人の句を重説

芭蕉翁新波の病床よりや之疾を治す時看病  
の人くふ發白成を以て流して曰今日よりして二三  
子の白へ家々死後の作らうと也ふがう故う一字  
の相談をかふ海が皆々其の好く考ふとの流へ  
る家くくあうむをそ粉骨をつくしりうら  
大州の白よ

うづくほれ某權の下れをさか 大州  
け白をうり出まうりと翁の終身あつらう去來是  
を笑て誠うく保時を山海の流奇と求うんはあう

の而く其滅とつてすべたありとらう風雅の奥義成  
案してくもくも大州が作をうらなふもあう  
う一人も悟らうとぞ蕉内よ大州去來有い  
和翁ふ人丸赤人あうがうくつら上と下をいさう  
作者るれどもやうに偏執さくよふまうみまう  
らう事道ふ堪能のまう一人のおまはうさ  
流のまういさ流なう又あう

有明くぬらうがうたまう那 去來  
おうくくごうたまや香た門全

其角嵐雪が菊の白歎息の説

嵐雪あり年々重湯よ

貴い菊の白菊その外乃名あるも亦 嵐雪

といふをきく其角ぬく足と感して云ふ家一生  
けいよふがごとく思ひもくんとそ終りして後其角  
よ菊の發白をきくそのわけは公海の

命もくや目ふたてゝる塵もあゝの白あふ嵐雪  
うこの白と書て其角書とあゝあはくゝ一紙が  
菊の白いかにざりゝとあゝ則をきく一社中乃



倚翠亭不持の則卷の画に其角が符の志を墨に  
 白を以て濃きより淡き迄の回縁了「灰塵と  
 あり」の情むをきよ堪へり「の」人そくをなす  
 純ん涼うたれぬよらと其時をせり「よ」の志を  
 とうきりその折く「む」平「ん」今うたれり  
 系ハ教の人多き「ん」風流の「ん」下りたる志  
 きん「ん」ことごとくも歎く「た」事にあ「ん」どや  
 せ「ん」祝融神の災を古人の書を考ふる「ん」  
 う「ん」金城の塩屋何「ん」か「ん」蕉翁の志

旅日記ありて其文の小笈の銘「暮柳舎乃  
 筆」して

け翁捨屋の布と志が終り那

と其志「ん」と法「ん」終り「ん」是も「ん」  
 火災「ん」う「ん」て今「ん」飛「ん」法「ん」は「ん」終り「ん」  
 舎「ん」ろ「ん」ご「ん」厚く是「ん」ろ「ん」つ「ん」て「ん」  
 庭「ん」よ「ん」む「ん」で「ん」笈の小笈とし「ん」  
 記行の「ん」ところ「ん」は「ん」梓「ん」り「ん」本「ん」書「ん」  
 し「ん」冊「ん」が「ん」志「ん」ろ「ん」加賀「ん」伝「ん」

或人其角ふ巻の点をと説

める人其角が言「点取の一巻をたつとこれ其巻  
 其物んうしてふた点とぶきいもあつた其角是を  
 ひくた二巻んさうくして使へていつていつてけ  
 事つたのう初んの事な程ばかろ附書と懸つた  
 二及びど速中比先紫ふ点をととどつとちつ使を  
 是程さうくして事とさうけお点料もあつていふてん  
 やとつひりらふ其角う云点料とては買ふおと先  
 懸るうとてあつたらうらうとぞさ程どを角う平

生風流る事と人皆知つたゆへう保るもあせ  
 とも推あつて貪もつとふ人もあつていふ風  
 雅ふねる事其角何をいふ小錢をむさぼらんや  
 今の宗通教とる者の内うを徒もたなく其志も  
 りあつてみてみづらに古人の洒落ふ撒さんところ  
 其志ありまゝたりの風雅を賣物して短冊う  
 候を定むる点料は甲乙を定むるふらあつて恐れた  
 其角がごとき其志あつて其徳あつて故に貪も又  
 風流まの二三子よく戒免はけしめて無欲な作



の凡雅人と成る一究賢塵俗よあらうたう能徳  
養とちう事あう徳うう負徳老人の連中老  
人は高息とくあれ事をかちちをらんに老人

二結の系うう細き能徳と点ちんさるさぞあれ  
としう徳らるを連中のあう一

二結の系うう細き能徳と点ちんさるさぞあれ  
と云うしてあいにううとぞかちちの思か一きた  
とくのさういあてはうに貪りもあう人あ一是  
夫ううあひんさるさるううして平生のきさうれを

さううううへうう能徳をりて口を粉とらその点料  
と受る事を則儒師の束脩佛家の布施と用く  
是れよくてたんと口腹をぬらんやあうひうれ強者業  
門をううも外の業なく能徳のきとて今日れ業  
とすうその料を定めて点をあとも又風流家の  
一律るうさんと其人ふうう其ふふさうひ料れ貴  
族をううら或ちうを賣筆を商人の業代門  
の風流者もいささかひて受さるあうり風流者此  
法國を起めする事は是又修りれ一なるう放れ

意翁も東海道の一筋をもんさうんハ風流の情  
 けうとわんふ戒免並給つうさればを新柳す  
 そのらさむ小居く志をう成りふ六旬偏うし事  
 延世の岩屋の巻和ふ短夜成あうしう紅鶴とく出  
 て破づさし一峭臺の庭はし一のぞれ小綱さ成柳が  
 ともんふ紅うりて志うしう成成樂しじまど皆  
 風流のふうなる成今時乃をとりたる流傳師を  
 さゆその風情を志とふらあうてあさうさるるこ乃  
 旦那をむるごとく今年れ氣旦速中ハらどふ

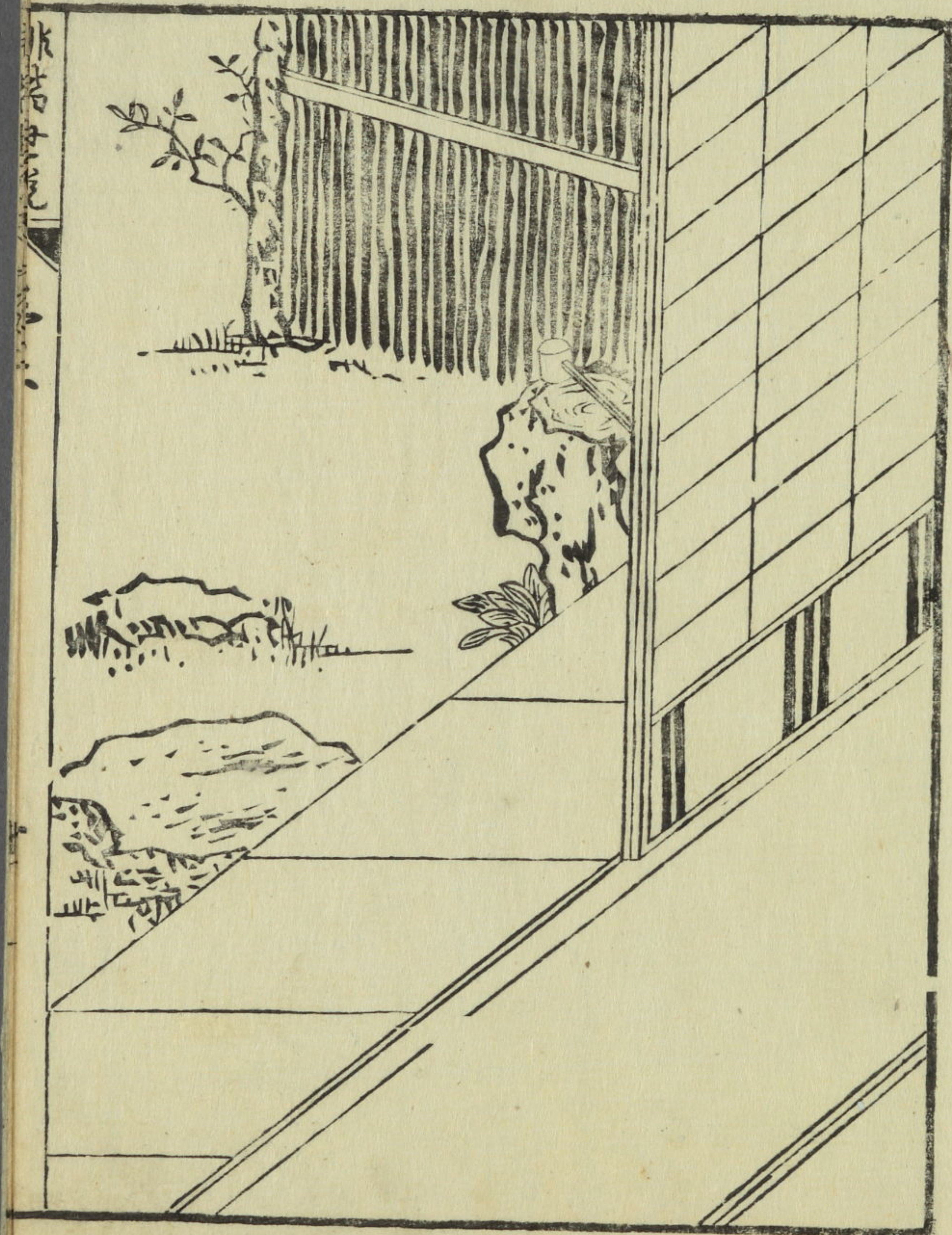
何程もさうりたりと口ももいんもよ成るやう  
 ずくふうずあうそ撰集成す免板料をり  
 免又も一宿成をさ合當るなとふ成後を  
 會うり人ふ内を後ぬとそうられても嘘よ水成  
 耳ももけと只風人の襟り成の何い成ハ葉  
 門必ハ商人足もハ新柳とえさうう鶴ととも  
 あうか人もあう成是や桃結ふ才一の傳受  
 ともとさうんも又むかうずや

眠ふ蝶よりく何をとるこ成 其角

嵐雪の妻猫と愛する説

嵐雪の妻くく孫このくくら能を愛してうらぐ  
 ちくくを志うせも常るぬ器よて  
 朝夕もびくく紙けるくくけのけ人ともく  
 りともうくくくく人もあくと嵐雪おくく  
 歎を愛するも種あくと事かたり人よもく  
 たる愛物器吟物とも忌げぬ日よも猫く  
 まま者紙吟たるなどようくぬくくはくや  
 けれども妻志のびても是紙あれた免げくけり

こくくの日書れくく人けり孫く留まの肉くく  
 物くくやうけの猫をけるく孫のくくのくく  
 寝さくく者かくくく吟せくくくく縁ゆく  
 ころやうけのくく出けぬ嵐雪かの孫くをく  
 くくくもきくく妻をたぐくくく猫をくく事  
 やめんとくくく物くくかろく不有く孫く  
 孫紙くく人くくきりくくく日書てく  
 先猫を孫めくく孫このくくくく孫く  
 くれくくくそののけをけりけくや



るこ程を切らばにふだもぬけらひも志す程  
 ちりけるおのまりくさしとせひ程を申して  
 さうなぞあてり程ども合もものもくらで只うりこ  
 たげぬらりしれそ門口で口こ踏まどけつ底  
 つまららぐまよりぬへ出けるやを隣をぬぬれも  
 今ひんごどどつゝ書はさけびてけましれた方と  
 もぬぬれどもぬぬれしこ日回されし書袂  
 ぬぬらうまぎう

猫乃書らうまぎう君のうりひか 書

うつてこちりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
 とすり隣家の内室是も猫をよぬたらがぬ書が  
 けりて化ぬへきけりける事ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 つまららぐまよりぬへ出けるやを隣をぬぬれも  
 今ひんごどどつゝ書はさけびてけましれた方と  
 もぬぬれどもぬぬれしこ日回されし書袂  
 ぬぬらうまぎう

けりてきりたるもきりてきりたるは異なり  
 衆一様なりともてあつてもいふは異なり  
 ろもといはれぬとてあつてもいふは異なり  
 衆門人きりていひてきりてきりてきりて  
 成やうけ猶もあつてもいふは異なり  
 ひりていひてきりてきりてきりて  
 しくよきとていふは異なり

よきとていふは異なり  
 嵐雪

惟然坊布と得る説

惟然坊ハ音ふまゝに一説に者あり西國行旅の時

あつては播磨姫路の方にあつてきりてきりて  
 りていひてきりてきりてきりて  
 学物をあつてもいふは異なり  
 出くあつてもいふは異なり  
 由は坊店にあつてもいふは異なり  
 てきりてきりてきりてきりて  
 らつてもいふは異なり  
 新衣とていふは異なり  
 立ちあつてもいふは異なり

ろり新しれまのいどこやう思んわしれいえの古むふ  
 思んぬふりたりたるとも居るのうさひくと服  
 りの垢分るものよ思んぬをもううんごと出  
 ぬこふあつて人もけい思んぬ道人のうを感  
 一物結うしてたふもみりるとぞ

汲水う米をうてし杜が 惟然

